

朝鮮語 大辭典

上卷

ㄱ~ㄷ

大阪外国語大学 朝鮮語研究室 編



角川書店

朝鮮語 大辭典

上卷
ㄱ~ㅅ

大阪外国語大学 朝鮮語研究室 編

主幹
塚本 勲・北嶋静江



角川書店

編 者 の こ と ば

1963年に大阪外国語大学に朝鮮語学科が設置されてまもなく、わたくしたちは辞典の編纂と朝鮮語の市民講座を始めました。朝鮮語学科の設置は戦後国公立大学で初めてのものであり、その責任の重さを感じるとともに、「朝鮮・韓国に背を向けた日本の社会」をなんとかしなければならぬ、という気持ちがつよくありました。それが辞典の編纂と朝鮮語市民講座という具体的な形をとったものと思います。

編纂は当時客員教授としておられた金思煒先生が提案されたように記憶します。塚本は朝-日辞典を用いず朝鮮語を学習し、辞典の必要性を痛切に感じていましたし、1958年に「朝鮮語基礎語彙調査表」を作成していましたので、この企てに即座に賛成したものと思います。初期のスタッフは金先生と塚本を中心に、朝鮮・韓国人、それに朝鮮語を学び始めたばかりの学生たちでした。京都大学の泉井久之助先生にもご協力をお願いし、快諾をいただき、その後ながく指導をあおぐことになりました。しかし1983年他界され、ここに本辞典をご覧いただけないのが残念です。

辞典編纂作業は、大きくいって、次の三つの点に凝縮することができます。1. 原稿の作成、2. 編纂スタッフをまとめて引っ張って行くこと、3. 編纂費です。

編纂開始の初期の段階においては、原稿の作成は手探りではありましたが、さまざまな工夫をこらす楽しさといったものに満ちていましたし、スタッフは皆張り切っていました。

しかし、編纂が進むにつれ、資料費・人件費など最小限の経費にも事欠くようになりました。そこで朝鮮奨学会の曹基亨支部長にお話しますと、さっそく理解を示され、康連南氏より40万円の寄付を取り寄せてくださいました。康氏の意向は、「60万在日朝鮮・韓国人のうち40万の人が母国語を知らない。その人たち一人に1円のつもりで40万円寄付したい」ということでした。初期の段階においてはこのほかにも塚本の身近の人々からご援助をいただきました。

泉井先生や大阪外国語大学元学長金子二郎氏のご尽力にもかかわらず出版の見通しが立たず、ただただ作らなければ、という情熱のみで仕事を推し進めました。辞典に記述するということは、特に初めてということは、日本語の簡単な表現にも難渋しました。米屋で用いる器具の名称や旗の部分の名称を求め商店を訪れたり、鴨の鳴き声を知るために動物園に問い合わせたりしました。朝鮮語には「笑い」を形容する言葉が数多くありますが、これはインフォーマントに実際に笑っていただき、それを日本語で表現する、といったようでした。また大阪外大の吉田弥寿夫先生には日本語に関する指導と校閲をしていただきました。

編纂は当初3年計画でしたが、この時間は、いつの間にか過ぎ去っていました。

1966年ごろから仕事は一応軌道に乗りはじめ出版のめどもつきました。また、北嶋が仕事に加わり、ネイティブスピーカの高木美寿氏が塚本の助手格として協力し、李載桓さんがインフォーマントとしてご尽力くださいました。学生たちの間にも辞典に対する気運が盛り上がり、阿部清比古・寺脇康子・李方佑・趙喜一・海野清・真野耕次・谷沢晴郎・福西秀彦・玉城繁徳君たちが連日研究室に詰め、座る席さえないというほどでした。

またこのころ、外国人講師となられた金東勲氏もながく熱心な執筆者兼インフォーマントでした。ほかに韓国から留学して来ておられた文旋奎氏や梁氏もおられました。また佐々木隆爾氏は社会科学を中心に種々ご協力をいただきました。故守川正道氏や姜斗興氏も熱心にお手伝いいただきました。

その過程で、予期しないことが起きました。辞典反対運動です。当時の世相は政治的な対立が、朝鮮に関することばかりかすべてのことに際立った時代でした。韓国の単語が見出し語に出ているというのが反対の理由だったようです。やっと軌道に乗ったばかりの時期、塚本には大きな打撃でした。塚本は授業を休み、編纂の断念を思いました。しかし、故京都産業大学教授菱山忍先生や中学時代の恩師大道久先生の激励に、また協力者たちの意気に気持ちをとりなおし、継続を決意しました。

その後しばらく平穏な時期がありましたが、あまり長くは続かず、大学紛争に明け暮れることになりました。この時期、学校は閉鎖され研究室が使えず、編纂室を大阪府教育会館、東大阪市文化会館、奈良市文化会館、奈良市婦人会館、橿原市図書館、上七ビルと転々としました。貸部屋を借りるので、毎日大きな旅行カバンやトランク・買い物カートに原稿用紙や辞典類を詰め込んで移動しました。トランクを肩にかつぎながら、外国旅行のようだと笑い合いましたが、「言葉の外国語旅行」であったのには違いありません。奈良のタクシーの中に大切な辞典類を置き忘れ、手を尽くして探しましたが、もどらなかったこともありました。

この時期のスタッフは塚本・北嶋、玉城繁徳・李文子さんの4人にインフォーマントの張禎淑・辛美慶さんでした。そしてこのころ仕事の内容が徐々に整理でき、手順のようなものが次のようになっていきました。

- 毎朝編集会議を行う。また、必要に応じて臨時の会議も開く。
- 仕事は工程・語の分類別に担当する。
- なるべく同室で仕事をし、連絡を密に取り合う。

連絡を担当する事務局は、守川正道氏——阿部清比古君——玉城繁徳君——前田綱紀君と受け継がれて来ました。また、仕事の分類とは、基本語・難解語・専門語・動、植物名・色彩語……といったもので、色彩語を担当した寺脇康子さんは約2年間これに取り組み、卒業論文に「朝鮮語の色彩表現」をものしました。基本語には力を入れました。納得がいくまで時間をかけるようにしました。3か月から半年近くあたたためて完成させたものもあり、「1項目が1論文」などと

話し合いました。単語に関する微妙な意味あい、語法、文法、文化的な背景、学習上の注意点などは、特別の注として✱（はなびら）の印のもとに自由に記述するようにしました。この✱は、いわば、日本・朝鮮両民族のカルチャーショックを埋めるものでした。

原稿の内容は次第に大きくふくれ上がり、仕事の進捗とともに質的にも量的にも向上し、小型辞典から中型辞典の規模へと移っていきました。この時期、1974年に大学院の設置もあって、執筆陣がうんと充実することになります。初期の段階では朝鮮・韓国人が主なメンバーでしたが、3～4年すると徐々に日本人が多くなり、大学院が置かれるころは日本人がその中心のほとんどを占めるようになりました。

仕事の分担は縦軸に教官——学生、横軸に教官を中心にインフォーマントを配した形でしたが、院生が参加するようになり、縦軸が教官——院生——学生となり、仕事の手順の襲が細やかになりました。この時期の主なスタッフは塚本・北嶋、玉城繁徳・李文子・前田綱紀・大西三千緒・奥田一広・生越直樹・田村マリ子・小林爽子・熊谷泰明君たちでした。きつくはありましたが院生としての研究と編纂作業を両立させようとする意気込みがあり、張りのある時期でした。

しかし、予定していた出版社が倒産し、出版のめどが立たなくなりました。塚本は苦悩のあまり、ある日酒の勢いにまかせて、当時の文部大臣永井道雄氏のお宅に電話をかけ、窮状を訴えたところ、永井氏はおおいにおどろかれ、緊急に科学研究費の交付を配慮してくださり実現の運びとなりました。これが大きな支えとなり、若いスタッフに再び気運が盛り上がり、仕事が進みました。しかし、出版のめどはまったくつきません。

このころ、日本言語学会の委員の方の勧めもあり、北嶋が本辞典について学会で発表しました。またさらに、編纂全体について雑誌「言語」にも発表しました。

一方、年来の夢でした「猪飼野朝鮮図書資料室」を開きました。この資料室の開室は検討に検討を重ねた末のものでした。辞典編纂スタッフと同じメンバーで運営するので、負担が倍増し、辞典も資料室も行き詰まる心配があったからです。しかし、結果的には両面においてプラスになりました。朝鮮語市民講座、朝鮮語電話講座が資料室のフル利用で発展しました。

やがて、宙に浮いていた出版が、角川書店のご厚意で解決、その好意と寛容は、この辞典を大辞典として編纂することを可能にしました。すでにこの時期、日本においては、数種の小辞典が刊行され、国際的には、朝鮮民主主義人民共和国においても、大韓民国においても本格的な大國語辞典が、また、外国語辞典としてはアメリカ・イギリス・モスクワ等において、それぞれ朝-英、朝-露辞典が出版されていました。このように大辞典の発刊とともに朝鮮語研究の気運が国際的に整ってきていたのです。

わたくしたちはこの辞典を、日本の言語学・朝鮮語学の研究の成果を盛り込み、かつ朝鮮語研究の水準を高め得る内容をもつものとして、さらに、将来にわたり、長く信頼され使用される辞典として完成させようと、大辞典を目指しての原稿作成に全力をそそぐことになりました。

そしてここで再度この辞典編纂の基本的な意義を確認しました。

およそ外国を知るにはまず言葉を知らねばならない。言葉は文化の基盤である。辞典は言葉の凝縮である。わたくしたちは言葉をとおして朝鮮を学び、研究する者である。まず辞典を作ろう。ことに朝鮮民族の言語は日本人に次のような点から重要である。

1. 朝鮮文化は日本文化と数千年の深い関わりがある。
2. 日本列島には約70万人の在日朝鮮・韓国人が、日本人とともに生活している。
3. 朝鮮民族は地理的にも最も近い隣人であり、国際的な意味で緊密な関係にある。

にもかかわらず、日本の社会は大学を含め、この言葉を受け容れていない。わたくしたちはこのような認識のもとに、辞典の作成により朝鮮語の普及をはかり、両民族の相互理解の礎となそうと試みるものである。

また一方で、この辞典が日本における朝鮮語研究に将来の展望を与えるものとして、次のようなものにしたいと考えました。

1. 研究の成果を凝縮したものとする。
2. 朝鮮語の文献の読解のかぎとなるものとする。
3. 一般の人々の使用に便利なものとし、朝鮮語の普及をはかり、両民族相互理解の礎となるものとする。そのため可能なかぎり広く朝鮮文化に関する情報を取り入れる。

このような考えをもって、わたくしたちはこの「朝鮮語大辞典」の編纂に取り組んで来ました。また、その構成と内容は最初は次のようなものを考えていました。

1. 巻頭論文集
2. 朝-日辞典
3. 日-朝辞典

一巻の中に、南北朝鮮の言葉を収めることを考えて編集を続けてきました。そこで中心となる

2. 朝-日辞典には大韓民国と朝鮮民主主義人民共和国に基本的に共通した語彙と大韓民国独自の語彙とを収めることとし、ここから漏れる朝鮮民主主義人民共和国独自の語彙を新しい共和国用語集としてまとめることにしました。当初計画した 3. 日-朝辞典は収録語彙数万の比較的簡単なもので南北双方の表記で執筆中でしたが、これは数年後に人手が足りず断念しました。

編纂室は力強く動き始めていました。小さな研究室と大学院生研究室はいつもスタッフで満員でした。春・夏の休暇には編纂室を猪飼野の「資料室」に移しました。✳（はなびら）の内容を分け、語法・語源・研究という項目に独立させたり、文学作品・歳時記・新聞記事など長文の引用も取り入れ、特に日本文学からの例も引きました。日本文学の朝鮮語訳には金静子さんがおおいに力を尽くされました。また、時には英訳も付しました。

集中講義に来てくださっていた岡山大学教授江実先生や、京都大学教授浜田敦先生から数々のご教示と激励を受け、おおいなる励みとなりました。

スタッフの中の院生たちからは、修士論文に辞典に関わる語彙論・意味論関係のものが提出されるようになり、これらの分析内容は辞典の中にアイテム化されて取り込まれました。

専門語校閲は在日韓国人・朝鮮人大学教員懇談会に依頼し、少数の方にはありましたがご協力を得ました。また、動・植物に関しては、柴田保彦・中原司氏にご協力いただきました。

原稿は毎月末に角川書店へ発送し、順次組まれていました。

1980年ごろからそれまでの5～6年間有力な協力者であった大西・熊谷・小林・後藤・田村・生越君たちは進学・就職の都合により東京・広島・ソウルなどに散り、各地で校正を続けました。しかし、スタッフの弱体化はいなめません。角川書店では森井俊彦氏を援けて李丞玉氏、のち金容権・小見山春生両氏らがともに校正に奮闘してくださいました。

弱体化したスタッフで校正を進めますが仕事はきびしく1982年秋、塚本はその激務に耐えず5度目の入院をし、8か月を病院で過ごすことになりました。そして翌年春、事務局をとりしきって来た玉城繁徳君が病気の後、17年の編集生活から離れました。角川書店佐野部長は中心部の衰退におどろき、スタッフの補充を約束してくださり、協力者を内外に求めました。

このころの学内の主なスタッフは北嶋、金静子さん、前田綱紀・李文子・有吉登美子・尹鍾順・小西敏夫・藤戸聡・益田治・野崎充彦・高秀賢・岸田文隆・佐藤次郎・藤井幸之助君、学外では各地の大学へ分散している諸君と光本氏たちでした。

わたくしたちの企ては長い時間と大きな広がりの中、次第に凝縮しつつありました。わたくしたちの意図したものは、辞典という形の中で朝鮮語の全貌をとらえることでした。全貌をとらえ、その特質を日本語に照らして分析し、日本語で表現していくことでした。そのため語義を施すにも単なる訳語でもってするにとどまらず、補訳を付し、注を加え、豊富に例文を当て、なおかつ文学作品・歳時記・新聞記事を加え、さらに今日までの日朝両言語に対する対照比較研究の成果をまとめ引用するというようにさまざまな新しい試みを重ねました。既刊の外国語辞典のわくとらわれない自由な試みを展開しました。朝-日辞典に『源氏物語』や石川啄木の詩があらわれ、川端康成の英語訳が朝鮮語訳とともに並ぶのもその一例です。

見出し語としては一般語彙のみにとどまらず、いわゆる百科事典的項目も十分に取り入れました。これは朝鮮民族の理解とそれに基づく親善をはかることが、歴史的に朝鮮半島侵略の過ちを犯し、その言語までも奪い、両民族の間に溝を深めてきた日本人の急務ではないかと考えるからです。そのため、人名・書名・歴史事項・風俗習慣など幅広く、言葉を通じて民族と文化に接しうるようつとめました。

これらの試みがどれほどの成果を挙げえたのかわかりません。一瞬のうちに22年の時間が過ぎ去りました。多数の人達のエネルギーが惜しみなく投じられ、道半ばに何度かの混乱にも遭遇し、企てが挫折しようとしたこともありました。しかし、人々のあつい情熱に支えられ、今日に至りました。

わたくしどもは持てる力の限りを尽くしましたが、さまざまな試みと膨大な記述のため、力の及ばない点が多々あることと思います。これはすべて編者の責任に帰するものです。この辞典を

利用される方々には、将来のため、随時ご教示を惜しまれないことを切望する次第です。

いまはただ、長い間この編纂事業の内外においてその完成のために直接、間接にご助力くださった方々、またご激励、ご支援くださった方々、なかでも角川書店の角川歴彦専務、佐野正利部長、森井俊彦氏、組版で多大のご協力をいただきました大韓教科書株式会社及び僑文社の皆様に心からの感謝を申し上げますとともに、この辞典が日本民族と朝鮮民族との理解と親善に役立ち、両民族共通の理念を支えるものとならんことを念願するものです。

1985年 8 月15日

塚 本 勲
北 嶋 静 江

二重主語の構文と日本語

泉 井 久之助

1. 二重の主語と日・朝語

日本語では「桜は花がきれいだ」、或いは、「僕は野球が嫌いだ」というように「……は……が……」の形で、二つの主語を一つの文の中で重ねて使う二重主語的な表現が日常、非常によく用いられる。いわば二つのトポス（主題 topos）が一つの単文の中で同時にあらわれるのだから、この様式は、外国語で名づけるとすれば、文字どおりダイトピカル（ditopical）な表現といってさしつかえがない。

しかし一つの単文の中には通例一つの主語だけがあらわれるとするのが、文の構成の原則上、どこの言語にもみとめられることだとすれば、これは少し異例なことといわなくてはならない。しかしわれわれは日本語で日常、これを少しも異例なこととは思わず、ごく自然な気持ちでこの様式を自由に使っている。しかもそれは単に日本語においてだけではない。日本語にきわめて並行した文の構成様式をもつ朝鮮の言語でも、「桜は花がきれいだ」の表現は、

poč-un kkoč'-i kōpta.

桜=ハ 花=ガ キレイダ。

として語の順序も助詞の置き方もそのまま、日本語と同じように構成されているのである（この と は大体英語の ch の音であり u はいわゆる「ひらくち」の u である）。

朝鮮語では文の構成様式が日本語に大体ひとしい上、動詞・形容詞もその活用様式は日本語のように行われるばかりか、日本語の「は」と「が」にあたる助詞としての二つの半語（half word）——即ち、自立語としての十分な独立性も持たなければ、古代の印欧語や今日のロシア語に見られる名詞の格語尾のように徹底した従接性も持たず、例えば前置詞・後置詞のように中間的な単語性を持つもの——も、互いにはっきりと区別をしあいながら存在するために、上の表現様式の日本語との並行性は、一層はっきりしてくる。「僕は野球が嫌いだ」というのも、

na-nun yaku-ka silhta.

僕=ハ 野球=ガ 嫌イダ。

として全く同様に、朝鮮語で、言いなおすことができる。

もっともいくら並行的だといっても、それぞれの言語にはその慣用に従って簡単な規則では一律に律し切れない「性格」的な細部の相違がある。異言語の修得にはいつもこの点に注意を払うことが大切なのであるが、朝鮮語と日本語の「は」と「が」の用法においても、日本語で「僕は心配になって…」というところを、「僕は心配がなって…」（na-nun kōkčōng-i twæso…）というふうに、「…になる」を朝鮮語では「ガなる」（-i tōta）と二重主語的にするのが、より慣用上の自然だということもある。とにかく朝鮮語にも「は」と「が」の区別は大筋において日本語とは並行的に立てられている。「は」は朝鮮語でその前の語が子音に終わるときは -un、母音に終わる場合は -nun であるが、「が」は子音のあとでは -i、母音のあとでは -ka である。二つの言語にはこうして「は」と「が」の区別がおおた並行する上に、その使用の仕方にも大体において並行性があり、時にはその並行性がわれわれには意外なところまで進んでいることがある。次は大阪外語大の塚本勲君に調べてもらった例の一つであるが、例えば三島由紀夫氏の『美德のよろめき』の朝鮮語訳（ソウル、青雲社）の第9頁に、原文の「節子は……

(な) 少年が好きだった」というところの訳が、

Sessukko-nun sonyon-i čohassta.

節子=ハ 少年=ガ よかった。

となっている。ここの「よい」(朝鮮語現在形 čohta) は、意味的には由紀夫氏の原文にもあるように「好く、好む」の意味である。この意味の「よい、いい」は日本語においても一種の他動詞性を持っている。他動詞性をふくむ日本語の「よい、いい」は、朝鮮語ではそれぞれの場合に適合するそれぞれの他動詞を用いて、例えば「彼は算術がいい」は、

kw-nun sansur-ul čal-hanta.

彼=ハ 算術=ヲ よくなる。

のように表現せられることが多い。だから上の由紀夫氏の原文も、「…ヲ好む」(-[n]ul čohahanta) で訳することもできる。或いはむしろこの方が朝鮮語では普通の言い方であるかも知れない。ところが朝鮮語の訳文はわざわざそこを「よかった」であらわしているのである。それは日本語の原文の「好きだった」には前後の関係から読みとれるように、節子にとっては自分の無意志的、或いは無意識的な選択において、どちらかといえば「瘦せぎすな少年」の方に心が惹かれ、こういう少年の方が「よかった」からである。訳者が誰であったかを聞き逃したけれども、この訳者は字面にあらわれない行間の文体的な動きを敏感に把握して、ここのところを上手に訳しているとわたくしには思われる。日本語の原文でもこのところを「好きだった」のかわりに「よかった」とすれば、無意識的或いは超意識的な選択の心持ちは、よりよく表現せられたにちがいない。普通は朝鮮語で他動詞的に「ヲ」によって表現せられるところに、「ガ」による「は…が」の形を用いることによって、この微妙な効果をもたらすことのできる可能性が日朝の両語に、たとい稀なケースにもせよ、共通するところがあるとすれば、ここに言語の使用形態を下から支え、これと相関の関係に立つ精神形態は、二つの言語において、深部における微妙な並行性を持っているにちがいない。同時にわれわれは、二重主語的表現がこのように歴史を異にした二つの言語において、これほど深部における微妙な一致を見出すからには、それは単に二つの言語だけの異例なものとして、単なる例外として、単純な論理の見地から、ひとえに皮相的に取扱われるにはあまりに深い根を、言語の一般使用意識中に、或いはむしろ意識の下に、ひろくおろしているにちがいないことを、感じないではいられない。果してそれは事実において、二つの言語に限られた現象ではなかったのである。

2. その他の言語と二重主語

事実、朝鮮語ほど、日本語との並行性を示すことはないけれども、大体これに準じることができる二重主語的な表現の様式は、他のさまざまな言語のなかにも思いのほか、ひろくあらわれている。ただそこでは、上の二つの言語が示す程度までには、二つの主語を区別する「半語」としての格助詞がわかれて存在せず、或いはその一方を欠き、または二つとも全く存在せず、或いは古いタイプの印欧語のごとくに両者は全く区別なく、ともに強度に従接のないいわゆる格語尾となって、一様に存在することが多いだけである。

例えばアメリカ・インディアンのアサパスカ語群に属するナヴァホ語においては次のような例がある (Gladys A. Reichard: *Navaho Grammar*, 1951, p. 296),

čidi bi-ke' na-n'it'ih.

車(ハ) ソノ=足(ガ) あちこち・動く。

つまり走る自動車の車輪が、左右にゆらゆらふれ動くことをいうのであるが、この言語では、主格的な「は」・「が」にあたる文法要素が全く欠けている。やむなく主格に対して無格の形をいわば裸でならべるのであるが、しかしその場合にも上の文を属格的に「車ノ足が……」と解することは決してできない。属格的な表現のためにはまた別に定まったその方法がある。やはり上の文は車というものを先ず大きく提示して、次にその部分に即しつつ、車の性質または状態を明らかにしようとする二重主語的な表現の一つである。

大体同じような表現の様式はまたアラブ語にも見出すことができる。

anâ (i)sm-i yūsuf.

私は 名=私の(ガ) ユースフ(デアル)。

ここで上のナヴァホ語と異なるところは、はじめの「私は」にあたる形がはっきり、主格の形をとっていることである。アラブ語では古いタイプの印欧語と同じように、その代名詞の「私」も、一つ一つその場合の格を内包せずには表現の上に現れることができない。それだけにアラブ語の上記の種類の表現は、ナヴァホ語の場合にくらべて一歩だけ、日本語・朝鮮語的な二重主語の表現のタイプに近づいているといえるであろう。

ほとんど同じ様式はまたトルコ語においても見出すことができる。そのバルカンと小アジアのトルコ共和国の今日のトルコ語においては、村山七郎さんからのご示教によれば、次のようなものがある。

fil ise, burn-u uzun-dur. (burn-u は burn-u から)

象ハ 鼻=ソノ 長い。

ここでの象(fil)は、トルコ諸語に一般的な現象として、その格を示す接尾辞が従接していないために、一応無格、または裸の主格と見なすことができる。つづく ise, ——これはここでは主格的な意味への明示の強調辞である。もともとそれは古代トルコ語の -sar, -sär と同じ語根の要素であって、動詞に従接して、「もし……ならば」をあらわす仮定法の形をつくる要素であった。この用法は今日も, geldi ise 「もし彼が来たなら(ば)」のようによく用いられる。それが転じて名詞・代名詞に後置されて、英語でいえば as for (you), 「君についていえば、君なら」の意味になったのだから、まさに日本語に訳すれば字義どおり、さきの文は、「象ならその鼻が長い」とすることができる。つまり「象ハ鼻が長い」である。事実、日本語の「は」には、これを「なら(ば)」で置きかえていくくらいに、強制的・拡大的なところもある。burn-u は単に「その鼻」であって、無格である。(以下略)

(元京都大学名誉教授、元日本語学会会長、「言語の構造」1967年より)

朝鮮語と私

服部四郎

朝鮮語は、懐しいと同時に好きな言語の一つである。

昭和3年に東大にはいると同時に、学習に熱中した東洋諸言語の中の一つだ。言うまでもなく、日本語との同系関係を探るためであった。講師は本田存先生といって、本職の東京外国語学校でも講師であられた。小柄ではいらなかったが、柔道は六段、水泳は水府流の達人とかで、いつもごま塩のざんぎりにして居られた。入門的な講義の後に、小学読本を一年生のから始めて六年生のまで6冊あげた。その後は新聞の切り抜きなどを読んで下さった。私は豪快なこの先生が大好きではあったが、そして先生は曾つての名通訳だったという事ではあったが、本当のことを言うと、朝鮮語は朝鮮の方から習いたいと、当時から強く希望していたのであった。

この言語に関するもう一つの思い出は、私が朝鮮語の小学読本を勉強しているのを見て、法科の友人が吹き出し了ったことである。奇想天外だと言うのだ。なるほどそんなものかと思ったが、それ以来あまりおおびらに人前で朝鮮語を勉強しなくなったように記憶する。この点に関し、現在の社会状況はどうなのであろうか。

昭和8年に、東洋言語学研究のため「満洲国」へ行き、同11年に帰国したが、行きにも帰りにも朝鮮を通った。そして、そのたびに、この愛する言語を話す人々の住む国土を、普通の日本人とは違った眼で車窓から飽かず眺めたことを思い出す。

この4月からNHKで朝鮮語の講座がテレビとラジオが始まっている。私は、機械の都合と暇がないのとで、テレビしか見ないが、これが大変な人気を呼んでいるとのことだ。世の中もずいぶん変わったものである。

実は、このテレビ講座の制作者である同じ金東俊さんと梅田博之君とで、「朝鮮語の基礎」というテープを作っ

たことがある。1967年4月、株式会社テック発行となっている。17年前のことだ。3巻ぐらいほしい所を1巻にするよう制限を受けたせいもあるが、今から考えると、あれは失敗作だったと思う。基礎語彙さえ入れておけばよいと考えて、それを出す順序を考えなかったのが、その原因の一つだと思う。

初めに名詞ばかり沢山出して、動詞・形容詞が後半に出るようにしたのが、いけない。むしろ重要な動詞・形容詞を先に出すべきだった。また、頻度数の研究を見ると、どの言語でも、感動詞・代名詞・数詞・副詞・接続詞などの頻度が高い。こういう単語を優先的に出すべきだ。また、当時は、動詞・形容詞などの「意義素」の研究に熱中していたので、それらの同義語、間の細かい意味の違いを、テープで問題にしすぎたのも、よくない。また二言語間の単語の意味の違いも、最初はあまり問題にしない方がよい。たとえば、意味の点で、英語の wind と日本語の「風」とは異なるけれども、最初は

wind = 風

で入門させて、次第に修正して行く方がよいと思う。

また、終戦直後、米国の外国語入門のやり方が挨拶ことばで始めるのを知って、軽薄のように思ったが、あれも一つの知恵だと思ふようになった。ああいうことばに習熟することにより、その外国人とすぐに言葉が交わせるようになるからだ。

あのテックのテープでは、先に朝鮮語を出して次にそれに当たる日本語が出てくるが、この順序は逆にした方がよいと考えるようになった。(大修館書店発行の『月刊言語』昭和60年6月号の拙論参照)

このごろ、テレビのハングル講座を聴いていると、梅田君たちも導入の仕方がずいぶん進歩されたなあと、しみじみ思う。とにかく、56年ぶりに私の強い希望が叶ったのだから、日曜日に1回のテレビのあの講座を楽しんでいる。そして、僕はやっぱり朝鮮語が好きなんだなあ、と心の中で反芻している。

(1984.7 東京大学名誉教授、元日本言語学会会長)

アクセントから見た日本語・朝鮮語の比較

村 山 七 郎

アルタイ的構造をもつ言語のうちでピッチ・アクセントによって語の意味を区別するものは、日本語と中期朝鮮語(Middle Korean. 以下 MK と略す)だけである。トルコ系、モンゴル系、ツングース・満州系のいずれの言語でもピッチ・アクセントによる意味区別は見られない。

日本語アクセントの極めて古風な姿は11世紀の京都方言のアクセントをうつした『類聚名義抄』に見られ、最近の研究によって8世紀(奈良時代)の畿内方言のアクセントもほぼ同じであったことが明らかとなった。『名義抄』の体系からの東日本方言体系の派生は金田一春彦、平山輝男氏らによって説かれている。

『名義抄』では、低く平らな声調、高く平らな声調、上昇調、下降調がみとめられる。次にいくつかの例を示そう(上線は高く平らな声調、下線は低く平らな声調、／は上昇調、＼は下降調を示すことにする)。

{ ミ ミ	身 箕	{ ハ ハ	葉 齒	{ カ カ	渴 肩	{ カ カ	川 皮	{ ハ ハ	鼻 花
-------------	--------	-------------	--------	-------------	--------	-------------	--------	-------------	--------

MK においては低い声調は無点、高い声調は1点、上昇調(始め低く、後が高い)は2点によって示された。下降調は無い。

{ 손 손	手 客	{ 솔 솔	松 刷毛	{ 발 발	足 すだれ	{ 가지 가지	枝 種類
-------------	--------	-------------	---------	-------------	----------	---------------	---------

(李基文『韓国語の歴史』邦訳 p.162参照)

朝鮮語のピッチ・アクセントは古代朝鮮語 (Old Korean. 以下 OK と略す) にはなかったかどうか、日本語のアクセントは奈良時代より古くはさかのぼり得ないかどうか。OK からの日本語の借用語における MK と『名義抄』のアクセントを対比して見て、もし両者が一致することが見出されるならば、MK は OK のアクセントを保持していること、また『名義抄』は奈良時代より古い時代のアクセントを保持していることが結論できよう。

実際はどうであろうか。仏教伝来と関係のある 仏, 寺, 鉢, および 評・郡や 鉦, 帔 (からむしの薄い布) についてしらべてみよう。

「名義抄」

「仏」 ホトケ < pōtō | ké
「寺」 テラ tera¹⁾
「鉢」 ハチ < pati²⁾
「評(郡)」 コホリ < kōpōri
「鉦」 ナタ nata³⁾
「帔」 ムシ musi

MK

부터 put'yə 「仏」
・달 tyər 「寺」
바·리 pari²⁾ 「鉢」
마·불 kever 「邑・村」
·난 nat 「鎌」
모시 mosi 「苧布」

- 1) 『四座講式』による。「名義抄」にもあれば、これと同じはず。
- 2) サンスクリット語 *pātra* 「鉢」の音訳鉢多羅の略。
- 3) アクセントは諸方言から復元した。

両者のアクセントが一致することは、これらの語の MK のアクセントが OK に由来すること、『名義抄』のアクセントは奈良時代より古く、OK の時代までさかのぼることを示す、と解釈できよう。

OK からの借用語でなく、日・朝共通祖語にさかのぼる可能性の推定される次の語のアクセントの一致は一層注目する。

「名義抄」

「朝」 アサ atsa
「言フ」¹⁾ イフ ip-
「負フ」¹⁾ オフ * ōp- < * əp-
「美シ」 クハシ kupa-si
「事」 コト kōtō < * kāta
「如シ」 ゴトシ gōtō-si
「島」 シマ sima
{ 「小」 スコシキ suko-siki } < * tsuka-
{ 「少」 スクナジ suku-nasi }
「日」 ヒ pī
「舳」 ヘ < * pai

MK

아·춤 ac'em 「朝」
·입 ip 「口」
업- əp- 「負う」
: 곱·다 kop-ta < * kupa- 「美しい」
것 kəs 「物」
·고·하·다 kēt hə-da 「如し」
: 섬 syəm < syəma < * sima 「島」
: 적 cɣək- < * cika- < * cuka- 「小さい。少ない」
·빛 pīc 「光」
·배 pēi 「舟」

- 1) 言フ, 負フは四段活用であり, 子音ステムと見られる。

このようなアクセント一致の例は数多く見られ、一致しない例も若干見られる。これらの一致が偶然でないと見ることが許されるならば、それらは共通祖語のアクセント状態を反映していることになる。

祖語の母音の長短の対立を日本語と朝鮮語がたがいに独立に高低アクセントに変えた可能性を考えることは、アルタイ諸語の中に本源的長母音を失った言語が少なくないのに、その代償としてピッチ・アクセントを生みだしたものが一つもないことを想起するとき、困難と見るべきである。非アルタイ的基層言語の影響を考えるべきかもしれない。

(元九州大学教授)

近くて遠い言語

河 野 六 郎

朝鮮はよく近くて遠い所と言われる。とりわけ韓国は最も近い隣国である。最近になってこそ、観光客も多数韓国を訪れるし、朝鮮語の講習会はどこでも盛況であるが、しかし、まだまだ朝鮮に関する大方の関心は低い。日本人は依然として欧米に眼を向けて足元を見ようとしない。朝鮮の事物の知識こそが両民族の和解の基礎である。

朝鮮の言語も日本語とは近くて遠い言語である。地球上、多くの言語が話されているが、構造が朝鮮語ほど日本語に似た言語はない。名詞はそれ自身曲用せず、テニヲハで他の語との関係を示す。そのテニヲハも日本語でよく問題にされるガとハの区別が微妙な異同を含みつつもこの言語にも見られる。形容詞が用言の一種であることも日本語と同じで、他のアルタイ語と異なる。ただ、日本語では形容詞は動詞とは別の活用をするのに対し、朝鮮語では基本的には活用は形容詞も動詞も一様である。いろいろの助動詞を着けて用言複合体を作るのも両言語共通である。しかも最も注目すべきことに、敬語の助動詞があり、この特徴は他の近隣の言語には見られない。ただし、朝鮮語には細かい区別を持つ文法形態が豊富で、その多様性はこの言語の文法現象の体系化を困難ならしめている。この形の上で微細な差異を示すことはその固有な語彙にも見られ、特に擬態語の異常な発達はこの言語の感覚性を特徴づけている。その結果、語彙の量も夥しい。塚本氏の辞典はよくこの特色を明らかにしてくれるものと期待される。

上述のように文法構造では大筋で一致する点が多い両言語であるが、さてその構造の枠を埋める音形は似ても似つかないものである。これが朝鮮語を学習する際の大きな障害になっている。また音形の相違が両言語の比較研究の成立を妨げている。というのは、最も固有の、基礎的な語彙に、両言語の親近性を認められるような規則的な音韻対応が見出せないからである。構造上、同じ類型に属しながら厳密な音韻対応が見られないことは、この両言語の発生的関係を考える上に大きな難問を遺している。

音形を構成する音韻の面でも、両言語はかなり相違する。少くとも現代語ではそうである。まず、音節の構成では、日本語はいわゆる開音節構造の言語であって、子音に終わる音節がない。これに対して朝鮮語には開音節もあれば閉音節もある。子音体系では、日本語には清濁の対立があるが、朝鮮語には清濁の対立はなく、その代わり無気音：有気音：‘濃音’の三系列の対立がある。母音も日本語は五母音であるが、朝鮮語は八母音である。一般に朝鮮語の音韻の方が多様で、かつはっきりしている。もっともこの状況は現代の状況で、古代へ遡ると、この二つの言語は案外似かよったものであったらしい。古代の日本語には濁音やrで始まる語は無かった。その点朝鮮語に近づく。他方、古代の朝鮮語の子音体系には無気と有気の対立が無かった形跡がある。‘濃音’は歴史的発展の所産である。また日本語の母音も上代では五母音ではなかった。

朝鮮は地理的にも近いが、歴史的にも近い。嘗ての日本は韓土の国々を先進国として、その文物の吸収に汲々としていた。特に中国の古文化は朝鮮を経て大量に我が国に導入された。ところが、この中国文化の受容が両国でかなり違うところが面白い。この相違は基本的には中国との相対的距離に帰すると思われるが、その相違は言語文化の面にも見られる。例えば、漢字の使い方であるが、日本では漢字を飼い馴らして、これを訓読し、さらにそこから仮名を造り出した。そして漢文も目で原文を追いつつ日本語のシンタックスによって訓読する。これに対して朝鮮では漢字は音読しかない。朝鮮では中国の直接的影響の下にありながら、漢字・漢文はやはり水に油で、朝鮮語とは依然として異質のものであった。このため朝鮮の国字ハングルは日本の仮名とは異なり、漢字から直接派生したものでなく、別の原理（アルファベットの原理）によって作られたのである。また今日、北朝鮮で漢字から脱却できたのもこの異質性によるものである。この点、日本で、あまりに漢字に馴れたため、漢字から脱け出すことが困難になっているのは皮肉である。

(東京教育大学名誉教授)

朝鮮語の先生

浜 田 敦

この表題と同じ名前の朝鮮語入門書が、私のこどものころ、朝鮮の古蹟調査に関係していた父の書架にあった。今も、ひきつがれて私の蔵書の一つになって、ある。扉の余白などに父の字で「ヌー（汝）」「チョンガ（総角）」などと書きこみのされているものなつかしい。この本は、「京城高等普通学校教諭従七位」の肩書のある崔在翊という人の著で、大正7年に出されたものであるが、明治末年から大正時代にかけては、このほかにも、入門書・文典類が割合多く出版されているはずである。

しかし、私が朝鮮語の勉強を志した昭和10年を過ぎるころには、そのような本はほとんど需要がなくなり、新刊書では手に入らず、古本屋でさがさねばならなくなっていたと思う。朝鮮における日本語普及ないし強制政策も最後の段階に近くなり、朝鮮語の使用は、公の場では勿論、うっかりすると、家庭内にまで立ち入って、禁止されかねまじき情勢となりつつあったのである。太平洋戦争が始まるころには、それまでは御用新聞の形であるにしても、とにかく発行をつづけて来た朝鮮語の新聞も、用紙不足に名をかりて、全くつぶされてしまうし、また、もと普通学校といった、朝鮮の小学校でも、それまでは、わずか1時間であるにしても、とにかく認められていた朝鮮語の授業が、すっかり姿を消してしまうことになる。このような中で、日本人が何を苦しんで朝鮮語の勉強をする必要があらうか、という時代であった。

また、実用上ではなく、純粋に学問的な興味から、この言葉を勉強、研究しようとする人も、決して多くはなかったはずである。これは、一つには、本来日本人が言葉というものに興味を持たず、従って、外国語が下手であるという民族性によるものとも言えそうである。それに比べると、隣国の朝鮮や中国には、驚くほど外国語の上手な人が多いように思われる。私の交わった、あまり数は多くないけれども、その国の友人たちも、すべて例外ではなかった。その一人に、私の「朝鮮語の先生」崔漢侯君があった。

崔君は、私が朝鮮語の勉強を志した、昭和14、5年当時旧制第三高等学校の生徒だったから、私と10歳違いぐらい、もしまだどこかに健在だとすれば、すでに60を過ぎる老人になられているはずである。どういうことで同君に教わることになったか記憶にさだかではないが、いずれはその地に移住して本格的な勉強をするまでの準備として、とりあえず、初歩の手ほどきを、ということで始めた勉強であった。

その時、まず使った教科書は、当時の朝鮮総督府発行、つまり国定教科書、小学校用の『朝鮮語読本』で、各学年1冊、併せて6冊の本であった。しかし、これは、日本ではなかなか入手出来ず、当時総督府の督学官をしておられた高等学校時代の恩師にお願いして送って頂いた。「こんなものがもし君の大学卒業祝いの代りになるのなら」というお手紙とともに、日本の国語読本そっくりの装釘の教科書6冊が届いた時のうれしきはまだ忘れられない。それをもとに、1週間に2、3度2時間ずつくらいレッスンを受けたはずである。

その下調べのために、やはり父の書架にあった総督府の『朝鮮語辞典』を使った。巻一のはじめは、一年生用でやはり字よりも絵の方が多く、ことばも、単語だけか、せいぜいわかち書きにされた短い文章であるため、何とかこの辞典で間に合ったが、だんだん進むにつれて、そう簡単には行かなくなる。辞典をひいてもなかなか見つからないことがしばしば出て来る。その理由の一つは、日本の仮名遣いと同じく、ハングル綴字法が変化して、同じ総督府のものでも、辞典と教科書とが、異なる方式によっているということである。しかし、この問題は、その方式の違いの原則さえ呑みこんでしまえば、何とか見当をつけて探し出すことが出来るが、辞典に全く載っていない単語にぶつかるとお手あげとなってしまう。総督府の辞典は、字音語ばかり多くて、日用、固有の朝鮮語を収録することが少ないとの世評の高いものである。そこで何とかほかの辞典がないものかと、いろいろ手を尽くして調べたあげく、ソウルの本屋から直接、ゲールの『韓英辞典』、そのころ出たばかりの文世栄の『朝鮮語辞典』などを取り

よせたりして、何とか小学校の読本くらいは読めるようになったと思う。

ところが、「読む」ことは出来ても、大学を卒業するような年になってから、教科書だけで学んだ外国語では、「話し」たり、「聞い」たりすることは至難のわざである。ことに、日本語に比べて音韻構造の複雑な朝鮮語の発音を正しく習得することは、私にとっては不可能に近く、何度も何度も崔先生に直されてもうまく行かず、とうとう先生もさじをなげ、これはやはり朝鮮に移住してからゆっくり勉強するとして、当面は読むことの勉強に専念したらという結果になってしまった。

この崔先生、はるばる笈を負って秀才校三高に遊学しているだけあって、学問、人格ともにすぐれた人物であったが、それも道理、人ぞ知る一世の碩学にして、しかも朝鮮独立運動の志士とも言われた崔南善先生の令息であった。やはり父君の血をうけて、ただの秀才ではなく、烈々たる憂国の心の持主で、私どもはしばしば朝鮮語の授業をそっちのけで、日本の同化政策の不当さや時局の問題などを論じたものである。2年ぐらい後、崔君は東大の法学部に入学し、京都を去ってからすでに半世紀に近い歳月が流れたが、その間杳としてその消息を聞かない。あのめまぐるしい戦中、戦後を何とか切りぬけて、彼の理想であった朝鮮民族の真の独立をかちとるために、どこかで活躍していることを心から祈らずにはいられない。

崔君が去って再び新しい先生につくこともなく、また、朝鮮の地に移住して本格的な勉強をするという希望も、戦争が次第に激化し、老いた母と私だけが残るという家庭の事情もあって、はかなく若き日の夢と消えてしまった。しかし、崔君から受けた手ほどきは、その後、私の専門である日本語の研究にとって、決して無駄ではなかったと信じている。その一つは、ハングル制定後間もない15世紀の末ごろから18世紀にかけて、司訳院で編纂刊行された日本語教科書が幾つか残されているが、多く両言語対訳の形をとるそれらの文献は、それぞれの時代の日本語の史的研究の資料として高い価値を持つもので、それらを正しく利用するためには、是非朝鮮語の知識が必要であるということである。ほぼ同じ時期に、西欧ポルトガルの宣教師の残したやはり日本語の教科書、また隣国中国人が特にそのころ盛んだった倭寇対策のために収集記録した日本語の語彙類が存在するが、それぞれの外国人の母語、文字、あるいは、日本語に対する立場などが異なるため、結果としての記録は、決して同じではなく、従って、それらをつきあわせることによって、はじめてより完全な当時の日本語の再構築が可能となるはずである。

いま一つ、朝鮮語の勉強が日本語研究に役立ったと考える理由は、言語と言わず、一般に、およそものごとの本質は、そのものだけに没入、沈潜しているだけではつかむことは出来ず、他のものとの比較対照によってはじめて可能となると言えるが、その場合比較の対象となるものが、あまりに違いすぎても、また、勿論、全く同じでも、その効果が少ない。そのような観点からすれば、日本語と、特に文法構造上酷似してはいるけれども、やはり随処にズレの認められる朝鮮語との比較対照は、そのズレが、手がかりとして、日本語の本質への反省の資となる。それは、例えば、あまりにも違いすぎて、言わば比べものにならない、英語などとの比較対照よりも、はるかに有効だと言うことが出来るであろう。ただ、不敏にして、せっかく崔先生から与えられた手びきを、十分に生かしきれず、見るべき成果をあげることもなしに、研究生活の終焉を迎えてしまったことを、崔先生に対しても、まことに相済まなく思う次第である。

(1984. 8. 15 京都大学名誉教授)

朝鮮語と日本語とタミル語の比較

大 野 晋

タミル語とはドラヴィダ語の一つで、インド亜大陸の最南部と、Sri Lankaの北部、東部とに分布し、約4,000万人が話している言語である。この言語はB.C. 2世紀からA.D. 2世紀にわたるSangam時代の2,500首の長歌と、それ以後の各時代の文学の多数の文献を保っている。

タミルの文化と日本の文化とを比較すると、婚姻・葬制・正月の行事に鮮明な対応または一致が見出される。例えば Sri Lanka タミルでは、婚姻は妻問い婚であり、妻屋・産屋を建てる。葬式としてはモガリを作って死者に奉仕する。人々は上界（神の世界）・中界（人間の世界）・下界（死者の世界）の三層を区別する世界観を持ち、イザナキのヨミの国訪問の神話に対応する葬儀の方式を現在も保っている。また1月15日の小正月の行事に一致する行事は1月15日の Pongal の行事として、タミル州及び Sri Lanka で現在行われている。これらの行事の対応はまことに驚くべきものがある。

タミル語は膠着語で、その文法組織は、全体としてアルタイ語に近似し、日本語とはほぼ共通であり、音韻組織も共通なところが多い。厳密な音韻法則に支持された比較語彙は350語を数える。大野の経験では、日本語と朝鮮語との間の比較語彙よりも日本語とタミル語との間の方が厳密に対応する比較語彙の数が多い。

大野は“*Sound Correspondences between Tamil and Japanese.*” (Gakushuin University, 1980) を出版し、また英文による論文を二つ書いた。しかしこの研究は、まだ始まったばかりであるから不明なことも多く、既発表の単語に誤りもある。この研究に対して日本の学界では否定的、拒否的な応対が支配的である。しかしヨーロッパのドラヴィダ語学者として著名な、オランダ、ユトレヒト大学の K. Zvelebil 教授、イギリス、エジンバラ大学の Asher 教授、チェコ、カレル大学の Vacek 教授は、この研究を大局的に見て、支持している。Zvelebil, Asher は日本語の勉強を始めている。Zvelebil は公式に大野の研究を5ページにわたって論評し、次のように述べている。

日本語とタミル語との同系論に証拠があるかといえば、細心の注意を以て述べて、肯定的である。一方、証明が完成されたかといえば全く否である。とは言え、深層の文法、語彙、そして多分音韻において、或る種の偶然でない関係が日本語とタミル語との間にあるとする見解は、本質的に捨て去ることはできない。〔中略〕

私はこの途方もなく複雑な問題が一個の学者によって解決されるだろうことを疑うものである。日本語の研究者とドラヴィダ語学研究者との間の、そして可能ならばアルタイ語学者とエラム語学者との協力を得て、偏見にとらわれない、緊密な、厳格な協同が必要であると思われる。〔下略〕

（“Tamil and Japanese, are they related? The hypothesis of Susumu Ohno.” B.S.O.A.S. XLV III, part one, 1985）。

さて私は以前、日本語と朝鮮語との比較を試みたことがあった。私の朝鮮語の知識は、まことに貧弱なものであったが、それでも両言語には、母音調和の存在、母音交替による造語法の類似など、注目すべき事実があると思われた。それゆえ、日本語とタミル語との比較の際にも、絶えず朝鮮語と日本語とタミル語という三言語の間の関係を念頭に置いている。以下にこの三言語に共通な比較語彙の存在について述べようと思う。私は未だ豊富な成果を得てはいないが、この小論が朝鮮語研究者の眼をドラヴィダ語に向けるに役立てばよいと考える。

まずタミル語と日本語との、母音と子音の組織を掲げ、両言語の間の音韻の対応の法則を提示する。

タミル語：日本語 (母音)	タミル語：日本語 (頭子音)	タミル語：日本語 (母音間子音)	タミル語：日本語 (母音間子音)
a : a	k- : k-	-k- : -k-	-t- : -t-
ā : a	c- : s-	-c- : -s-	-ṇ- : -ṇ-
i : i	t- : t-	-t- : -t-	-r- : -r-
ī : i	ñ- : n-	-ñ- : -n-	-l- : -r-
u : u/ö	n- : n-	*-p->-v- : *-p->-F-	-ṛ- : -r-
ū : u/ö	p- : *p->F-	-m- : -m-	-ṅk- : -ṅg-
e : i	m- : m-	-y- : -y-	-ñc- : -ṅz-
ē : i	y- : y-	-r- : -r-	-ṇṭ- : -ṅd-
o : a	v- : w-/F-	-l- : -r-	-nt- : -ṅd-
ō : a		-v- : -w-/b-	-mp- : -ṁb-

タミル語の母音は長短を区別し、それによって語の異同を弁別する。古代日本語には母音の長短の区別はない。タミル語の子音には clusters (str, spr, tr, pl など) が無い。日本語にも無い。タミル語の r, l, ṛ, ṇ は語頭に立たない。日本語は r 一つでそれらに対応し、その r は語頭に立たない。タミル語には巻舌の ṇ, ṭ, ṇṭ があるが、巻舌子音は日本語に無い。日本語の有声子音 g, z, d, b は、歴史時代に鼻音の glide を持ち、[ⁿg][ⁿz][ⁿd][ⁿb] であったが、それはタミル語の鼻音と破裂子音、破擦子音とが結合した ṅk, ṅc, ṇṭ, nt, mp とそれぞれ対応する。